

特集

「私の風景」を描く

授業時数や、学校の立地などの環境によっては
取り扱いの難しい風景画。

今号は、そんな風景画に「中学生にこそ向き合ってほしい」と考え、
積極的に取り組む飯田成子先生の授業を取材した。

撮影 鈴木俊介（一部、学校より提供）



授業レポート

埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校

飯田成子^{あさ か}先生^{いい だ しげ こ} × 2年生（1～3組各39名）

「自らの置かれた環境について深く考え始める
中学2年生という時期に、身近な風景を見つめ、描く題材を
設定している」と語る飯田先生。風景を写実的に描くのではなく、
「生徒たちが風景を見つめる中で、自身のアイデンティティに
迫るような発見や感動があれば嬉しい」と考える先生の授業には、
さまざまな工夫が散りばめられていた。

第1時

風景画について知る

4月から3か月にわたり、全11時
間で行われた2年生の風景画の授業。
生徒たちには、春休みに「風景画を
多く描いた画家について調べ、自分

の考えをまとめる」という課題が出
されており、第1時はその課題の発
表からスタートした。ターナー、ミ
レー、ゴッホなどさまざまな画家に
ついての発表がなされる中、いちば
ん人気はモネ。「影に黒を使ってい
ない」「奥行きを感じさせる構図や



上／屋上から学校周辺の風景を
撮影。見慣れたはずの景色が、
少し違って見える。
右／生徒Aさんのスライド。
着眼点や構図がユニークなのは
クラス全体で共有する。

遠く長い橋



風景のイメージ物語
屋上から見た景色。
近いようで遠く感じる。川と長い長い橋。
強風に対して、川は負けても橋は耐え続ける。
そういうたくましさで頼れる雰囲気、私の心
に響いた。

ピサロだったら、少しの雲の動きも忠実に
再現するんだろうなと思った。
撮影した写真には、緑がたくさん写って
いる。私の場合、そんなにたくさん緑を
作るのはいくらでもできるけれど、
ピサロは緑を再現している。ピサロの
ように、無駄に色を使わず、な
おかつ忠実に再現するというのを真似
てみたい。

自分のエピソード
橋の近くのスーパードに行く時、長く大
きい橋を見るのが決まりになっている。遠
くから流れてきている川が、どんどん押
し流されていく姿を見るのも私の小さな
楽しみ。
その橋の近くに住んでるわけではないけ
ど、いつも通ってる道なので思い出さ
ない。だから選んだ。

色の対比など、1枚の絵の中にたく
さんの工夫が詰まっている」といっ
た感想が、驚きをもって共有された。

生徒たちの風景画への関心が高ま
ってきたところで、飯田先生はごく
簡単に風景画の歴史について語った。

西洋では、14世紀頃から神話や宗
教を主題にした作品の背景として風
景が描かれていたが、17世紀に入
ると、身近な風景が描かれるようにな
ったことを説明。さらにカメラの発
明により、見たままの風景を描くの
ではなく、「見た風景をどう解釈して
表現するか」が大事にされるように
なった、ということの説明をした。

そして、生徒たちに、「風景を見た
ままに描くのではなく、風景から何
を感じ、どんなふうに描きたいか考
えることが大事」と強調した。

第2～4時

風景をどう描くか考える

生徒たちはタブレット端末を持ち、
校内や学校周辺で、描きたい風景を
探した。さまざまな角度から写真に
収め、同時に自分がどんな思いをも
ってその場所を描くのか、考えを深
めていく。

その後、候補を三つに絞り、それ
ぞれの場所をどう描きたいかをタブ
レット端末を用いてスライドにまと
めた。風景を見た瞬間の感動や、そ
の場所で起こった印象的な出来事の
ほかにも、もし自分がゴッホだった
らこんなふうに描くだろうといった
予想などもスライドにまとめて、グ
ループ内やクラス全体で共有。意見
交換しながら考えを深め、候補を一
つに絞っていった。



上／試行錯誤を要するトリミングと、タブレット端末の相性は抜群だ。
下／生徒が描きたいサイズに画用紙を裁断する飯田先生。

描きたい場所が決まったら、主題がより明確になるように写真をトリミングしていく。風景をタブレット端末で撮影しておく、画面上で何度もトリミングし直すことが可能だ。中には、横長のパノラマ写真のような大胆なトリミングを施す生徒も。思い通りにトリミングができれば、クロッキー帳にアイデアスケッチをした後、下描きに入る。

飯田先生は、「画用紙のサイズにとらわれなくていいよ。切ればいいから」とアドバイスし、生徒が自由な発想で描けるよう後押しした。

第5～10時

自分の表現を模索する

下描きが終わったら、次はいよいよ着彩だ。塗り始める前に、飯田先生は刷毛、スポンジ、ローラーを使った広い面積を塗る技法を実演してみせた。生徒たちは完成図を思い描きながら、どんな技法が効果的か検討する。

刷毛やローラーなど思い思いの用具を手にした生徒たちは、空や草原などから塗り始めた。まず最初に面積の広い部分から塗り進めることで、「いつまでも終わらない」という生徒の心理的な負荷も下がるそうだ。さらに、右記のような着彩の工程を黒板に大きく掲示することで、誰もがとまどうことなく取り組むことができ、少ない授業時間の中でも効率的に制作を進められるという。

水彩画 着彩のしかた

着 彩 初 期

- ① 淡い色から
- ② 遠くから
- ③ 太い筆で
- ④ 水を多めに
- ⑤ 全体を大まかに

着 彩 中 期

- ① 少し濃いめに
- ② 影の所など
- ③ 中くらいの筆で
- ④ 水は多めに
- ⑤ 色を重ねて

着 彩 後 期

- ① 深みのある色で
- ② 見せたいところを中心に
- ③ 細かい筆や水彩色鉛筆で
- ④ 説明的にならないで



左／花と草むらの部分は、絵の具チューブの口部分を画用紙に押し付けた後、手でなじませて、点描のような表現に。この独特な表現方法は、制作を進める中で生徒自身が考えた。
右／美術室から持ち出したパステルを使って、雲の影の部分を淡い色合いで表現。水彩絵の具だけでなく、コンテやパステル、水彩色鉛筆などの描画材も表現に合わせて使用する。

天候に恵まれた日は、教室の外に出て、実際の風景に目を凝らしながら描いていく。写真を見ているだけでは感じ取れない、明暗や色彩、その場所のにおいや雰囲気などを実感しながら描くことができ、生徒たちは実に楽しそうだ。

教室を出る前、飯田先生は毎時異なる声掛けを行っていた。「今日は色をたくさん見つけてみよう。1年生のときにやった混色のしかたを思い出して」「今日は、光と影に気を付けてみよう。明るいところと暗いところをよく見ようね」。

立地条件によっては、学外に出ることが難しい学校も多いだろう。その場合、飯田先生は、「窓から眺めた風景を描こう」というように学外に出なくても描ける課題を設定をしたり、「自分のプライベートな空間を描いてみよう」といった解釈の自由度が高い課題にしたりするなど、工夫をしているそうだ。



野球部で思い入れのある、ネット越しの景色を描く。

授業展開 生徒の活動(全11時間)

第1時▶導入

風景画を多く描いた画家について調べたことを発表し、風景画のおおまかな歴史を知る。

第2-4時▶制作①

風景を撮影し、どうしてその場所を描きたいのか、どのように描きたいのか言語化してまとめる。主題が明確になるように写真のトリミングを工夫し、アイデアスケッチをする。

第5-10時▶制作②

どのような形や色、技法を使ったら自分の描きたい風景を表せるか考えて描く。

第11時▶まとめ

形や色、技法の工夫、風景の表現への関心などについて振り返りシートを作成し、完成作品はグループ内で鑑賞し合う。

学習目標

- 心ひかれる風景を見つけ、その理由を考えるとともに、思い入れを表すために形や色、技法などを工夫して描く。
- 作品を鑑賞し、その風景を描いた作者の思いや表現の工夫を感じ取る。

評価規準

- 形や色、材料、光などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などをとらえ、心ひかれる風景を全体のイメージで捉えることを理解している。(知識)
- 材料や用具の特性を生かし、自分の表したい気持ちや描きたいイメージに応じて、工夫して表している。(技能)
- 心ひかれる風景を見つけ、その理由を考えることで主題を生み出し、全体と部分との関係などを考えながら構成を工夫して構想を練っている。(発想)
- 描かれている風景の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。(鑑賞)
- 美術の創造活動の喜びを味わい、心ひかれる風景を描く表現の学習活動に主体的に取り組もうとしている。(態表)
- 美術の創造活動の喜びを味わい、風景画を描いた作者の思いや表現の工夫を感じ取る鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている。(態鑑)

第11時

振り返り、相互鑑賞

作品が完成したら、①形や色で工夫したこと、②挑戦したり試したりした技法、③風景の表現に関心がもてたか、これからの自分に生かせることはありそうかといった質問に回

答するかたちで制作を振り返るシートを作成。完成した作品は、グループ内で鑑賞し合った。同じ場所を描きながらも、まったく異なる主題の作品ができあがったことに驚く声や、「Aさんらしい!」といった、描いた人の個性のあらわれに納得するような感想が聞かれた。

生徒たちの表現のプロセス



Mさん▶「光を印象的に描きたい」

- ① 天気がいよい日に体育館裏の風景を見て「なんてきれいなんだろう」と感じ、描くことに。奥行感があるのもこの場所の魅力だと感じたので、縦の構図にした。
- ② 緑がキラキラしていたのが印象的だったので、初めに薄い黄色をのせ、その上から青を足すことで鮮やかな緑を作り出す。
- ③ 光と影を印象的に描き出すために、影となる部分には濁った色を使用した。



Sさん▶「ゴッホみたいに描きたい」

- ① 事前課題でゴッホの作品を見て「ゴッホのように植物を力強く描いてみたい」と思い、学校近くの川沿いの草むらを描くことにした。草むらが画面の中心になる構図に。
- ② 絵の具を少なめの水で溶き、力強いタッチで色をのせていく。
- ③ 草むらが印象的に見えるように、画用紙の両端を切って正方形の作品に仕上げた。



Rさん▶「お気に入りの木を中心に描きたい」

- ① 入学当初から、校庭にあるこの木が好きでよく見上げていた。お気に入りの木を中心にして、自然に囲まれた校舎を描きたい。
- ② 木の存在感を表現したいので、枝の間から校舎が見える横長の構図に。薄い水色で空の色を塗った後、手前の木を描きこんでいく。
- ③ 年季の入った幹を描くために、絵の具の「かすれ」を生かしたり、黄色や青などの色を使って立体的に見えるよう工夫したりした。



授業を終えて



飯田成子
いいだ・しげこ
埼玉県生まれ。
跡見学園女子大学文学部
美学美術史学科卒業。
埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校教諭。

今回の授業で特に工夫した点は、「風景画について知り、考えること」と「トリミング」です。風景画を多く描いた画家について調べたり、調べたことをクラスで共有したりすることで、一口に風景画といっても、多種多様な表現があるということに気づきます。そうして発見したことをベースに、画家ならこの風景をどう描くか、自分ならどうだろうと考えていくことが表現の工夫につながっていったように思います。授業の構想の出発点に、「自分で作品のサイズを決めるところから制作をスタートさせたい」という思いが

ありました。画用紙のサイズに、表現を縛られるのはもったいないと思ったのです。その結果、「いちばん描きたいものを目立たせるために正方形にトリミングする」といった、自身の表現したいものに合わせて、トリミングを駆使しながら構図を考える生徒の姿も見られました。完成した作品は、どれもその生徒らしさが感じられるものとなっていて、「風景画に取り組む中で、自身のアイデンティティに迫るような体験をしてほしい」という願いが少しは達成されたのかな、と思っています。

授業を参観して



中川昇次
ながわ・しょうじ
埼玉県生まれ。
群馬大学教育学部卒業。
前さいたま市立片柳中学校校長。
元埼玉県美術教育連盟長。

朝霞五中を訪問するたびに、夢中で表現活動を行っている生徒たちの姿に感心するばかりでした。飯田先生は特別なことはしていないと言っていましたが、教育環境やICTの活用、生徒の創造性に働きかける授業上の工夫などについて、さまざまな示唆を得ることができました。美術室等の教育環境は特筆すべきもので、教室に入った瞬間に創作意欲を掻き立てられます。教室内の壁面は用具や材料、資料等の刺激で埋め尽くされ、教室の真ん中には、本時の授業で使用するであろう材料や描画材が出番を待っている状態。廊下には、生徒作品等が展示され、美術室周辺が校内でも特別な場所であることが感じ取れました。教育環境が生徒に与える影響の大きさを考えずにはいられませんでした。

ット端末が使用できる状況にあり、本題材では、写真撮影・写真への補助線入れやトリミング・電子黒板との連動・途中段階の作品画像を指定フォルダに保存させることで制作過程を把握・評価資料の収集につなげる等、タブレット端末をフル活用していました。また、調べた画家の表現の特徴を振り返り、画用紙の形を自由にカットし、画材別の特徴の把握や色づくりにこだわらせる等の取り組みは、新たな感じ方や感性を育てることにつながるものでした。美術の学びは、与えられた課題を正解に導くものではなく、この授業のように、生徒が自分の求める答えを見つけ、それを創造的に解決していくことなのだと思います。

学校は、GIGAスクール構想において一人一台の端末の整備が進み、その活用のしかたが課題になっていますが、この点においても参考となる授業実践でした。生徒は常にタブレ

実践のすべてにおいて、飯田先生の教育的想像力と美術教育への熱意を感じました。飯田先生の美術ミッションに向き合い、見事に解決していく生徒たちのこれからがとても楽しみです。